

# C-ENGINE

## 研究インターンシップ詳細事例

Vol.14 2022  
三次元情報計測可能なイメージセンサーの開発

京都大学 ×  
凸版印刷株式会社

### 未来を創る種づくり 研究インターンシップという挑戦

研究インターンシップは、学生、企業にとって有益であるといわれていましたが、これを普及、定着させることは大変困難なことでした。私たちは、複数の大学と複数の企業とがコンソーシアムを形成し、これまでにない新たなインターンシップのかたちを構築、普及、推進することでこの課題に取組んでいます。

大学コーディネーターが学生と大学教員、企業との間に入り、それぞれのケースに応じて個別に調整をはかることで、研究インターンシップの質が向上するとともに、量もまた拡大しています。インターンシップ実施に関するノウハウも蓄積し、すでにいくつかのグッドプラクティスが生まれつつあります。こうした事例を積み上げ、「人」と「知」の交流を続けることが、イノベーションの創出につながると私たちは確信しています。

# 学生の視点



## 「今後の視野を広げるのに役立つ 研究インターンシップ」

こう こうしん  
**黄 浩辰**さん

京都大学 大学院工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻  
精密計測加工学研究室 博士後期課程2年

### インターンシップ概要

実施期間: 2022年5月7日～2022年8月9日(3か月)

受入先: 凸版印刷株式会社 総合研究所

テーマ: 三次元情報計測可能なイメージセンサーの開発

今回のインターンシップについて、全体的な印象をお聞かせください

黄 私がインターンシップを開始する前の目的の一つは、企業の研究所がどう機能しているのか、企業で研究員の方々がどう研究をしているのか、そして研究所、大学、企業がどう協力をしているのかを知ることでしたので、実際にたくさんのこと学びました。凸版印刷でインターンシップをしていたときの環境、皆さんとの関係性、研究自体を直で見て、とても良い企業だと感じました。企業の研究所と大学の研究室とを比べますと、私たち(大学院)の研究室では機械に関する色々な研究をしていますが、凸版印刷の研究所では、ToFカメラの開発のための研究をされていました。つまり、その研究所での研究分野は(大学の研究室よりも)とても特化されていると思います。

今回、私の実施したインターンシップは3ヶ月の長期に渡るものでした。当初はToFカメラについては実は知らないことばかりでしたが、皆さんがそのカメラの原理と、いくつかの原理的実験について教えてくださいました。このおかげで、私はカメラに関してかなり早く学ぶことができたと思っています。

C-ENGINE事務局 インターンシップ期間中、黄さんは、企業のメンバーの一員になっていたように拝見しました。最終報告会でも、社員の皆さんのが「黄さんはとてもまじめにプロとして働いているから、たくさん報酬を払わないといけないのは」と(冗談で)おっしゃっているのを聞きました。普通、企業側はあまりこういうことは言わないので、黄さんが会社でとても良い働きをされたのだと思います。今回は良い環境の中で、社員の皆さんも、黄さんがされた仕事に対して敬意を示しておられたようですね

黄 一部のメンバーからもその冗談は言われました。私も皆さんと同じような仕事をしているのに、インターンシップの手当しかもらっていないと(笑)。実のところ、私は今回のインターンシップで大学より単位を頂けておりますし、さらに、このような良い雰囲気のラボで一緒に研究することができて光榮です。

現在大学院で取り組まれている研究について紹介してください。また、これまで自分の研究で意識してきたことは何ですか

黄 私の専攻はマイクロエンジニアリングで、この専攻は私が大学で学んだ分野と似ていたことから選びました。

研究テーマは視覚に基づく三次元の動的運動計測についてです。(指導教員)河野先生がいくつか選択肢を下さり、これがとても良いと考え、一緒にこのテーマで研究することを決めました。実は研究を始めたころは、私の研究は他の方の研究内容との差別化が容易ではないのではと思っていた。しかし深く進めるにつれて、彼らの研究とは分野が異なり、私の研究はモデリングに関する分野での再利用もできるため、非常に価値がある研究だと考えています。

インターンシップでの経験を振り返り、今どう感じていますか?

黄 インターンシップを振り返ると、これまでとは違う人々と異なる研究所で働くことができたため、大変おもしろい経験だったと思います。また凸版印刷総合研究所の研究員は皆さん、研究の課題や問題の見つけ方、それをどう段階的に解決するかについてのメソッドをすでに持っていました。そういう人たちと働いた経験は、私が自身の研究をすすめていく上で役に立つと思っています。

インターンシップ期間中に心がけたこと、または工夫したことは何ですか?

黄 実はインターンシップを始めたばかりのとき、研究所の方々からは、少し複雑な状況において、あるメソッドを私に評価するよう期待されましたが、インターン最終月に、私が新しいメソッドを提案しました。これは、発生した問題に対してとても有益だったと考えています。

既に(凸版印刷での)最終報告会で発表済みではあります  
が、少し詳しく言いますと、マルチパスで機械学習をベースに

問題を解決します。これは実験室で提案されたG方程式の基本的な考え方とほぼ同じであり、私は異なる計算方法を選択して問題を検討しました。

## 研究に対する姿勢やモチベーションなど、大学での研究に影響を与えたものは何ですか？

黄　　はい、基本的には三次元のモデリングメソッドを作りたいと思っていて、これが私自身の研究に対する基本的な姿勢です。モチベーションの1つめは、もちろんとても重要ですが、博士課程を終えることです。2つめは、このテーマはある種の計測にとても有効で役立つと思っていますので、河野先生と一緒に研究を続けた後に完成させたいですし、この研究が他の研究にも貢献できると良いと思っています。

## 日本企業でインターンシップに参加してみてどんな新しい視点を得ましたか、また、参加してみて最も印象に残ったことは何ですか？

黄　　いくつかの変化がありました。今回のインターンシップをする前、何社か中国の会社で短期間のインターンシップをしたことがあります。純粋な研究部署ではないので、企業の研究型の仕事についてはよく知りませんでした。中国企業は、特に研究、企業内の管理体制という点で、例えば凸版印刷のような日本企業とは全く違います。基本的に(日本企業の)研究員は、研究や関連する仕事に集中していて、以前私が想像していたような、あまり意味のない仕事には時間を割かないようにしていると思います。(中国企業での経験から)私は研究や会社に関係がないこともたくさんあるはずだと思っていましたし、社員は毎日時間を無駄にするようなことをしていることもあるはずだと思っていたが、実際には、全くそんなことはありませんでした。また、他の研究所でのインターンシップで研究手法に関する研究をしたこともあります。今回その研究手法とはまた少し異なったものでしたので、視野が広がったように思います。

もう1つは、企業内の研究所では、私が考えていたよりも関係者打合せが多くなったことです。大学の研究室で行っていたような打合せが、企業の研究所でもありましたが、顧客、上司、他の研究者や他社の研究所などともたくさんの打合せをしていました。毎日、平均でいうと2つか3つは関係者打合せがあり、私が想定していたよりも5倍ほどは多かったと思います。その理由は、企業の多くの研究に具体的なニーズや応用シーンがあるためではないかと考えられます。研究の需要に適合させるために、研究の方向性をリアルタイムに調整する必要があるのだと理解しています。

## どんなスキルが向上しましたか、また適性などで気づいた点はありますか？

黄　　私がこのインターンシップで一番大きく伸びたと思う点は、研究を進めながら問題や課題を見つけるスキルだと思います。実際にインターンシップ中に、研究所での別の研究テーマに参加し、メンバーの1人として動いていたので、他の研究員たちがどのように研究しているのかを、直に色々と見ることができました。研究をしている中で変な数字などが出てきたことで問題を抱えることもあります。メンバーは皆、その数字一つひとつから深く学んでおられました。

私自身は、これまでそのようなことが実践できていなかったことに気づきました。それからというもの、自分の研究をしていてうまくいかない部分を見つけたとき、その部分についてもっと学ぶようになりました。ときどき時間の無駄となってしまうこともあります。研究全体の大きな目で見れば、必ず役に立つことだと思います。

## 将来的にアカデミックや、企業、その他の機関等で、どのような研究者になりたいですか、また、その実現のために既にされていることは何ですか？

黄　　実はインターンシップを始める前、河野先生とお話しをさせていただき、私は機械加工に関連した企業で研究者になることを考えているとお伝えしました。私の家族もこの分野で働いており、このような(機械加工関連)企業がどのようなものか、すでに多くを見聞きした経験があったからです。

しかし、今回の研究インターンシップの後、私が働く分野は思っていたよりももっと広いかもしれませんことに気づきました。ToFカメラは視覚に関連しているため、機械加工とは直接的な関連はないと思っていましたが、先述の通り、私の研究テーマはカメラをベースにしており、機械加工ともより大きく関係があるため、将来、仕事上の専門分野の一部になり得ると今は考えています。モデリングなどについても検討してみようと思っています。

## 研究インターンシッププログラムに将来参加する予定の後輩学生に対してメッセージをお願いします

黄　　一番大切なことは、このような(研究)インターンシップへの参加は非常に価値があるということです。前の質問の中でお答えしたように、研究インターンシップは、視野を広げるのに非常に有効だと思います。これはとても大事なことです。研究室であまりアクティブでない後輩学生に対しては、企業の研究所において何かしらの経験を持つことが、大学の研究室で研究することにも必ず役立つことを伝えたいです。これも重要なことですので、是非、積極的に研究インターンシップに参加してみて欲しいと思います。

# 大学教員の視点

## 〔博士研究の目的・方針の明確化には 大学の外での経験も重要〕



京都大学 大学院工学研究科  
マイクロエンジニアリング専攻 精密計測加工学研究室

准教授 河野 大輔 先生

### 学生の教育について、重視している点は何ですか

まず大事なことは、一人前になり、1人で与えられた仕事を進めていけるということだと思っています。具体的に言うのであれば、機械系の視点に基づいて、与えられた課題もしくは問題を解決可能なタスクとして、個別の小さな問題に分解して考えていける人材になることが大切と考えています。そのような課題を原理、原則に基づいて分解し、解決に少しでも近づくことを目指して、そうできるように指導しているつもりです。

### 黄さんはその様な指導の方向性に合致しておられますか？

博士になりますとこれが一段レベルが上がり、かなり抽象的な問題に対してそのようなことができ、さらに人を動かしながら大きなプロジェクトを動かせるような人材になってほしいと考えています。(黄さんは)かなり訓練を積んで問題の分解ができるようになってきていると思いますので、この「抽象度が上がったときに、うまく分解できるようになれるか」という点が、この1、2年で伸びてくれると良いと思っています。

### 学生をインターンシップに送り出すにあたり、ご本人、環境、論文執筆や研究室での研究時間などを含め、何かご不安に感じられた点がありましたか

特に不安に感じる点はなかったのですが、黄さんが留学生でしたので、会社内でのコミュニケーションがどれだけされるかという心配がありました。本人は日本語を普通に話せるようになってきていますので、さほど問題はないとも思う反面、大学研究室内では、同級生同士の会話という意味でハードルも低いですし、英語でも話そうと思えば通じますので、そのあたり企業では、どのぐらいのコミュニケーションのハードルが、どの辺りにあるのかというのが、オンラインでのインタビュー(注:受入検討にあたっての三者面談)だけではわからなかつたので心配しておりました。ですが、IDMにログインして(黄さんの)報告書や実施中の様子を見ていると、うまくコミュニケーションも取れ、順調に業務を進めているようで、

全く杞憂であったことがわかりました。

### 研究インターンシップを経て、学生に成長を感じた点があれば教えてください

インターンシップで得られたものがこれからどう活きるかは、まだ時間が短いので判断し難いですが、実施内容を本人から聞かせてもらい、今自分が持っているスキルをしっかりと活かして、それを先方から与えられた課題に応用することができていた様子でしたので、その部分は非常に成長したなどいうふうに感じております。

### 研究インターンシップについて、お考えのことがあればお聞かせください

私は(研究インターンシップに限らず)インターンシップに行くことには非常に賛成です。個人の意見としては、博士課程であれば、例えば半年とかいう長い期間で(大学の)外で何かを経験しなさいということを必須にすべきだと思います。

我々の大学ですと修士に行く学生がほとんどですが、修士に行く前に、どちらかの企業や研究所で一度研究をして、自分が学びたい、もしくは学ばないといけないと思った内容をはっきりと明確にしてから、その内容に合った、大学院なりスキルをつける学校なりに進学すべきではないかとも思っています。なんとなく修士に行って専門的な内容を習って、世の中に出で就職する場合だと、その考え方自体はもちろん使えますが、専門的な知識という意味で、中にはほとんど使わない内容もあるわけです。例えば私の場合は、流体の知識などはあまり使っておりませんので、そういう点が少しもったいないという考えを持っています。

### C-ENGINEについて一言お願いします

今回、これほど良いテーマが見つかったのも、C-ENGINEさんのおかげです。我々だけですと探すのは難しいので、今回のサポートは非常に助かりました。

## 「凸版の面白さを伝え、互いに刺激しあえる機会に」



指導に当られた高橋様(写真左)と針生様(写真右)

### インターンシップテーマの設定、事前準備について

**C-ENGINE事務局** 受入決定後、実際にインターンシップが始まるまでに、しばらく期間がありました。実施テーマはどのように決められましたか。

**中込(以下敬称略)** 今回、私がこのテーマを設定したときに、このインターンシップの期間で何かしらの成果を出すのは難しいかなと思っておりました。もともとテーマをどうしようかと考えたときに、3ヶ月の半分くらいは我々の技術を知っていただくことになるので、研究できるのは1ヶ月から、長くても1ヶ月半くらいと想定しておりました。ところが、(事前の面談を通じて)彼が非常に優秀だとわかりましたので、1ヶ月で答えるが出来るものといつても、あまり簡単な課題を与えて、予定調和みたいなインターンをやつてもしかたがないと思っておりましたところ、インターン実施前に黄さんからToFセンサーという技術について論文等で調べたレポートが届きました。ToFセンサーとはこういう用途に使うセンサーですという内容と、一方でこういう場面で使うとこういう問題が起こるだろうという内容がまとめられていて、それに関連する解決策の提案を論文で発表している研究者もいるといったような情報提示もありました。そのようなレポートを持ってきてくれましたので、それを見て、彼なら難しい課題を与えてもしっかりやってくれそうだなと思いました。そこで「あえてまだ我々も解決できていない課題と一緒に考えてください」ということになり、インターンシップの期間で成果が形として出てくるというよりは、「我々のメンバーと一緒に試行錯誤をして悩む」というようなテーマを設定することにしました。

**C-ENGINE事務局** 当初の予定よりテーマのハードルが上がったということですね、実際に行われていかがでしたか。

**中込** 考え方であったり、仕事へのアプローチであったり、その中で完全な答えではなくても、何か一つ切り口が見えたという事でも成果としては十分と考えて、インターンをやらせ

凸版印刷株式会社

事業開発本部 TOF事業推進センター

センター長

野口 達夫 様

TOFセンサー開発課長

中込 友洋 様

主任

高橋 聰 様

針生 弘光 様

事業開発本部 総合研究所

総務チーム

主任

渡邊 友紀 様

ていただきましたが、我々が全くアプローチとして考えていなかった機械学習を使った課題解決というところで、彼なりの切り口で、新しい課題へのアプローチを提案していただきました。期間が短かったため検証の初期段階というレベルの結果ではありましたが、確かに効果がありそうだというところが見えていたので、良い成果を出していただいたと感じています。

**C-ENGINE事務局** 凸版さんの技術者の方からご覧になつても、新しい道筋を一つ作ったようなかたちと言えますでしょうか。

**中込** その通りです。正直に言えば、黄さんの切り口についてもっと時間をかけて色々と進めたいと思ったくらいです。

### 留学生への対応について

**C-ENGINE事務局** 外国の方ということで、言葉の問題や、生活環境の違いがある中でインターンシップを進めていく際に、どのようなご苦労や、難しいと感じることがありましたか。また、黄さんは実際の研究を進められるにあたって、日本語での実施は可能な状況でしたでしょうか。

**野口** 日本語については、よくわからないことを「わからない」と言うことができていれば問題はないかと思います。言葉を変えて説明するとか、ゆっくり説明すればわかるくらいの日本語力はお持ちだったので、インターンシップ実施中は、受入れ側の我々があまり英語が得意ではなかったということもあり、基本的には日本語で説明して、うまく黄さんが理解できなかつたところは、翻訳アプリなどを使用するということもしていました。黄さんは中国からダイレクトに我々のところに来たわけではなくて、日本に住んだ経験が既にある方なので、インターンシップ実施中は、むしろ生活を楽しんでくれたのではないかと思います。「こんな田舎にきた」というのは少しあつたかもしれません。(笑)。

# 企業の視点

## 最初の導入部分の実施について

**C-ENGINE事務局** 黄さんは優秀な方とのことでしたが、ToFカメラに関しては全く経験が無いという状況で、最初の導入部分ではどのような教育方法をとられたのでしょうか。

**中込** 黄さんのインターンの開始タイミングと、当社の新入社員が配属されるタイミングがほぼ同時期だったという状況がありまして、まず我々の技術を知っていただくという意味では、新入社員と一緒に勉強していただきました。

**C-ENGINE事務局** 新規に異動されてきた方々が学ばれるタイミングと合わせて一緒にレクチャーを実施されたということですね。凸版の(新入)社員と黄さんを比較して何か違いを感じることはありましたか。

**中込** 黄さんは博士ということで、自身で色々と調べて、技術や知識に対する貪欲さがすごく強いという印象を持ちました。黄さんの物怖じしない性格といったところも関係があるのかもしれませんし、さらに、社員は長いスパンで勉強しながら成長していくという計画を立てられると思いますが、黄さんの場合は3ヶ月しかないため、この期間でなんとしても知識を吸収するんだという思いもあったのではないかなと思います。

## インターンシップ実施の際に注意されたこと、配慮された点などは?

**中込** 我々が事業化を進めているテーマ絡みで数社のグループ会社と連携して開発をしているものがあります。我々は黄さんをインターンとして受け入れている側ですが、グループ会社にはそれは関係のない話ですから、グループ会社側の秘密情報が何らかのかたちで黄さんに入ってしまうのは

よろしくありませんので、やはりそこは社員ではなく、学生であるというところで配慮しました。例えばグループ会社と合同でミーティングする際には席を離れていただくとか、そのような打ち合わせの際にはリモートで業務をしていただきました。

**C-ENGINE事務局** 貸与するコンピューターにセキュリティロックをかけたり、USBを使用させないなどのデータの流出防止策以外に、実験室、研究室の中で実際に起こった事柄などに対する秘密情報の漏洩防止で、配慮されているようなことはありますか。

**野口** 開示されている情報に関してはもちろん我々もチェックしていますが、一緒に業務を行っていると、もっと色々な情報が彼に入っているので、そこに問題はないのかと言われますと、我々にはわからないところですね。短期の学生さんなので、そこは大学が担保されているという前提で受け入れています。インターンシップから帰って何を話しているかは我々にはわからないですから、大学がそういうこと(漏洩)をしない学生を、我々に推薦してくれているということが前提ではあります。

## インターンシップ実施期間中のIDMシステム上への報告書掲載について

**C-ENGINE事務局** 今回のケースでは、黄さんが週報として記録したものを、貴社に内容確認していただき、その後IDMのシステムに掲載することにより、大学の指導教員に対しても、インターンシップでこういうことを学ばせていただいているという情報共有をさせていただきました。そういった報告書公開方式に関しては如何でしょうか。

**中込** 私の方で黄さんの週報は確認させていただいて、



凸版印刷株式会社総合研究所

外部に出ては困るような記載内容がないことを確認した上でIDMに掲載させていただいたので、その点に関しては特に大きな問題はなかったかと思います。

## オンライン・リアルでの実施、及び実施期間について

**C-ENGINE事務局** 昨今、コロナ禍がなかなか終息しない状況の中で、今回の3ヶ月はリアル(対面)で実施いただきましたが、実施の状況はいかがでしたか。

**中込** タイミング的には、週に1回、リモートワークがあるかないか、といったような形式でした。グループ会社との打ち合わせが集中する曜日があったので、そこは半日ないし1日リモートにして頂くということはありましたが、グループ会社の客先情報が入らないような、通常の技術ディスカッションのレベルであれば参加していただくなど、途中からはほぼリアル(対面)で実施しました。

**C-ENGINE事務局** 色々とご苦労があったのではと思いますが。

**野口** 彼にはリアルで実施していただきましたが、凸版印刷全体としては結構リモートで仕事を行っています。我々の事業所は方々に拠点があるため、基本的にはリモート勤務です。今回は彼に実験データを短期間でとってもらわないといけなかつたため、ほとんどの期間をリアルで参加していただきました。しかしながら、今回は例外的に対面で実施しましたが、会社のポリシーとしてこれを推奨しているというわけではありません。

**中込** 今回、黄さんには多く出社していただきましたが、その一方で、質問をしたい時に回答する凸版印刷のメンバーが出社していないことがあって、お手間を与えてしまったかもしれません。

**C-ENGINE事務局** 今回は3ヶ月の実施期間ということでしたが、今後、研究インターンシップを実施していくにあたり3ヶ月という期間は長さとしてはいかがでしょうか。

**野口** まとまった仕事をしようと思ったら数週間では短すぎますね。仕事のやり方を教えるだけで期間が終わってしまいます。受入れ側としても教え甲斐があるという意味では、3ヶ月ぐらいの期間、学生が本気で研究したいということであればウエルカムです。

**C-ENGINE事務局** リモート、リアル等の実施の形態によつてもインターンシップの期間は影響を受けるとお考えでしょうか。

**野口** 打ち合わせや報告はリモートで問題ありません。実験は設備がないとできないため、どうしてもリアルになります。

期間については、どういう意識で実施するかですね。今回の黄さんのように、価値のある成果を我々に対して出してもらいたいと思う場合は、あまり短期ではできないですね。

一方で、凸版印刷では、いわゆる印刷会社を超えたような数々の仕事を推進していますが、そういう状況を多くの人に理解してもらいたいと思うと、長い時間で多くの人に来て頂くというのは物理的に無理です。従って、そのような趣旨で実施するならば、見学会のようなお互いの負荷が少ない実施方法になろうかと思いますので、期間の長短はインターンシップを実施する趣旨によるかと思います。特に、短期の場合は成果を期待するのではなく、凸版印刷が面白いことをやっているということを多くの学生さんに理解していただき、将来の就職先の一つとして考えていただくという目的になります。そのような活動は我々にとっても大事なことですので、その場合は、インターンシップをそういう活動に近いものと割り切ることになりますね。

## 研究インターンシップの企業での成果と今後の方向性について

**C-ENGINE事務局** インターンシップを終えられて、貴社のなかで特に成果があつたということはありましたか。

**中込** かなり優秀な方に来ていただいたので、今回は研究所内のスタッフには、非常に刺激になったと思います。

**野口** 国際学会で発表する社員は、黄さんと知り会えて、英語の勉強相手が確保できたことを喜んでいました。その様な、インターン学生と接する中で副次的に生まれる効果も、インターンシップの成果ということになろうかと思います。

**C-ENGINE事務局** 貴社でも、C-ENGINEの研究インターンシップの他にも、様々な形でインターンシップを実施していらっしゃると思いますが、今後実施されるインターンシップの目的として、どのような方向性のものが中心になっていくとお考えですか。

**野口** 私は事業としての直接的な効果を、インターン生にあまり求めるべきではないと思っています。もし新しい分野で新しいことを立ち上げたいと考えるときに、1ヶ月、2ヶ月、長くて3ヶ月のインターンシップでやっていただいても、事業化まではできませんので、基本的にはインターンシップが我々の事業に対して戦力になるという考え方はありません。一方で、副次効果を求めていないわけではないです。たとえ大変でもインターンシップを実施しているので、そこはしっかりと見極めた上で、受け入れをさせていただいています。

やはり我々が期待していることは、凸版印刷に対して興味を持ってもらうことです。面白い仕事をしている会社だという

# 企業の視点

ことを理解していただき、それをきっかけに、最終的には卒業後に凸版印刷に就職したいと思っていただきたいです。さらに、インターン生から他の学生に「凸版印刷って面白いことをやっているから、君は凸版印刷が向いているんじゃないかな」とすすめもらうとか、正直に言うと、そういうところにも期待をしています。

もちろん、よほど飛び抜けたスキルがあり、我々は今そこに届いていないで、事業としてそういう人が欲しい、というような事もあるかもしれません、そういうスキルをインターン生に求めることはあまり有りません。副次的な効果として、黄さんの様に研究の成果が出せたら大変嬉しいし、新たな人が研究所に入ってきて、一緒に仕事をすることで我々が刺激を受けるところも勿論あります。また、一緒に食事に行くような交流も面白かったりします。そういう副次的効果はいっぱいあると思いますが、それは事業の本流研究をなんとかすることをインターン生にお願いするというわけではありません。

**C-ENGINE事務局** あくまでも学生と企業間での「教育」として、研究インターンシップをお考えいただいているわけですね。

## 今後のインターンシップの方向性について

**C-ENGINE事務局** 貴社のインターンシップの今後の全体的な方向性をお聞かせいただきたいと思います。例えば今

回はToFカメラということでしたが、そういった個別の分野に対して非常にピンポイントで技術を持っていらっしゃる学生さんと、ある程度技術の範囲が広くて、問題を発見してそれを解決する方法を探していくようなトレーニングを積んでいる学生さんとでは、どちらの方がよりインターンシップ生として受け入れを希望されますか。

**野口** ピンポイントで我々の事業の為の技術を持っているといった学生さんは、まずいないかと思います。先に申し上げたように、我々が期待していることは凸版印刷に興味を持つてもらう、凸版印刷は単に印刷会社ではないということを皆さんに分かって頂くことです。そして、面白いことをやっているな、是非将来は一緒にやりたいなと思って頂くことが正直な期待です。その中で一緒に仕事ができる程度のオーバーラップがあれば、それでいいと思っています。現場では一生懸命、物理的な評価を実施しているのに、数学を専攻する学生さんだとそれに対応するのはしんどいだろうとか、そういうケースはあります。我々がやっている分野にある程度のオーバーラップは必要ですが、ピンポイントでやっている人はなかなかいないと思います。

**渡邊** 研究インターンシップに参加してくれた学生さんが将来当社を志望してくださる方向性は歓迎しています。色々な学生さんに来ていただきたいと考えています。

## 「C-ENGINEからのメッセージ」

この度は黄さんの受け入れに大変ご尽力頂き、また結果もお互いに良かったということで、私どもも大変喜んでおります。本当にありがとうございました。

あまり期待はされていないというお話もございましたが、今回のケースではさまざまな副次的効果を実感していただいたようで、大変嬉しく思います。C-ENGINEの研究インターンシップは、これまでに600件以上実施しており、こうした「副次的効果」が出る確率もかなり高くなっているようです。本当に優秀な学生がおられますことに、我々も驚いております。

あくまでもマッチングの運の様な部分もありますが、やはり優秀な学生さんが興味を惹くようなテーマを企業側としてどう出されるのかというところが、大きなポイントになると考えております。是非、良い学生の知的関心を刺激するテーマを今後もご提示いただければ大変ありがたく存じます。この度は本当にありがとうございました。

一般社団法人  
産学協働イノベーション人材育成協議会  
(C-ENGINE)

Twitter: [https://twitter.com/C\\_ENGINE\\_JAPAN](https://twitter.com/C_ENGINE_JAPAN) Instagram: [https://www.instagram.com/contact\\_cengine/](https://www.instagram.com/contact_cengine/)

〒606-8302 京都市左京区吉田牛ノ宮町4 日本イタリア会館 305

TEL: 075-746-6872 Mail: [contact@c-engine.org](mailto:contact@c-engine.org)

URL: <https://www.c-engine.org> oVice: <https://c-engine.oice.in/>